



短歌募集

△課題 随意

△〆切 毎月末日

△賞品 三光に粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙随意清書して左記の處へ送らる可し

但添削返稿を望まざる、方は往復葉書又は切

手封入の事

「伊勢國白子局稻生みどり會」



短歌 起 雲 選

○ 筆とりて入りし若葉の森清う泉めぐらば朝露のちる肌白き人の湯浴を窺ひて待べるに似たり夕顔の花

松田小波

○ 朝鳥の清々しくも啼く窓によべ見し夢を操り返す哉瑠璃なせる海原くれて歸る帆に思ひ出多き夏休み哉

中川龍

○ 忍び音に泣きし夕べを雲亂れ雨よぶ如き鳥の叫びや人は愛に光りを添へて樂しうも此世終へなば願ひや足らむ

鈴村仙子

○ 懐しき聲の限りを道ときて瘦せませし君を思ふ夕べや夏朝を野川に立ちて薄れ行く星の影見る我瘦せにけり

玉尾紫水

○ 紫陽花の影泉水に彩雲とすれくうつる夏夕べ哉

青山美香

○ 山つ姫の葉守の神と泣む御酒か木々紺青に酔ひ流す雨

廣瀬涼風

○ 藤より洩るゝともしの主は誰ぞよく聞き馴れし朗吟の聲

谷桶水

○ 訪へば萩の戸固く閉されてあるじ痴の窗に興する
大西益子

○ 平 岩 學 洋
世を侘びて山に骸を潜めつゝ歌の世夢む人は瘦せたり

○ 中 西 斐 蔭
變り行く雲の形を眺めてはうつし此世を泣く夕べかな

○ 尾 上 政 子
朝窓に近うも匂ふ白蓮の露美しくしき鐘の響や

○ 眞 未
夏瀆の夕べ眞砂路さまよへば波涼しうも月さし昇る

○ 田 邊 孝
夕雲や初夏かざる野の錯と花なき里を寒う流るゝ
菩提樹に斧をかざせば山鳥のぼろく啼きぬ朝明の森

○ 林 靜 子
物思ひ窓の月に寄る夏夕べ音なくちりぬ紅のけし
瘦せし頬に笑みをつくりて慰めん母君もなし啼く子規

○ 伊 藤 天 郎
暗の夜を神が呪ひの聲のごと身に泌み渡る水のせいらぎ
讀みさし、伊勢を枕に畫むせば又好き夢の胸にも入らなむ

○ 順 禮 子
順禮に身の上話しきく夜なり怪しう更けぬ山子規
花ならば白あざみこそよからむと夕野逍遙ふ我頼は瘦せぬ

○ 中 村 鶴 聲
塵の世をかこつ子茲に來たらすや胸さながらに清し白瀧

うすもの、秋にふれてそと搖るゝ白百合くしき匂ひにこめたる

うらぶれて小島に舟す繪師と我が浮世語りにははくれにけり
灯とりて大星小星したゝかに酔ひもしぬらむ七夕の宵

無聊吟社句集

水底の苔まで見ゆる清水かな	天
枝蛙夕吹く風の雨近き	同
松風の余りをそよぐ青田かな	文
藻の花や明日咲く花は水の底	同
今人の呑だ跡あり苔清水	同
飛で来て袖に隠るゝ壁かな	き
山伏の山を下るや蚊喰鳥	同
花桐や茶畑つゞき寺の裏	泉
活花は遠州流や夏座敷	同
蚤も居ぬ絹の蒲團や京旅宿	同
掛香や老いたる妻の憂き思ひ	愛
よき水を得て歸りけり百合の花	同
朝風や君を見送る夏衣	耕
小さき手に持ちきれぬ程の覆盆子かな	同
兩岸の芽の茂りや行々子	醉